

酒田市立資料館第232回企画展

ありがとう45年 未来へとつなぐ酒田の宝物

館蔵品展 その3—人物資料—

令和5年8月5日(土)～9月30日(土)

当館における最後の企画展となる本展では、4月から3回に分けて、展示する機会の少なかった貴重な資料を中心に館蔵品を紹介してきました。最終回は「その3—人物資料—」として、『夜明けのうた』『希望』などのヒット曲で知られる歌手・岸洋子をはじめ、酒田出身または酒田で活躍した人物に関連した資料を展示します。

これまでもお知らせしているとおり、酒田市立資料館は令和5年9月30日をもって閉館し、市立光丘文庫とともに郷土の資料を収集、保管、展示していく施設として、令和6年度に酒田市総合文化センターの市立図書館跡に新たに開館します。

当館の収蔵資料は、酒田の歴史・民俗・産業・文化を紐解くための資料として次世代に残していかなければならない、市民にとっての宝物です。新たに設置される文化資料館(仮称)は、現在の資料館と光丘文庫の機能のほか、近代以降の酒田の歩みを伝える歴史公文書の管理と活用もあわせて担うこととなり、真の意味で総合的に酒田の歴史を未来に伝える施設を目指してまいります。

45年間にわたって愛されてきた資料館の伝統を受け継ぎつつ、これまで以上に多くの皆様に利用される郷土の文化を伝える施設となるよう努めてまいりますので、これからもどうぞよろしく願いいたします。



開館直前の酒田市立資料館



土門拳 揮毫「酒田市立資料館」

現在も使用されている「酒田市立資料館」の題字は、酒田出身の写真家・土門拳によるものです。昭和53年当時、土門拳は2度の脳出血のため右手がきかず、車いすの生活を送っていましたが、相馬大作市長(当時)より直々に依頼を受け、不自由な体をおして左手で書きました。



開館初日の資料館の様子

昭和53年(1978)5月18日

第1回企画展「酒田のあゆみ」は8月27日まで開催されました。縄文時代の石器や土器などの考古資料から、江戸時代の絵図、古文書などの歴史資料、鶴渡川原人形などの民俗資料まで、さまざまな分野の資料を展示して、酒田の歴史をたどりました。

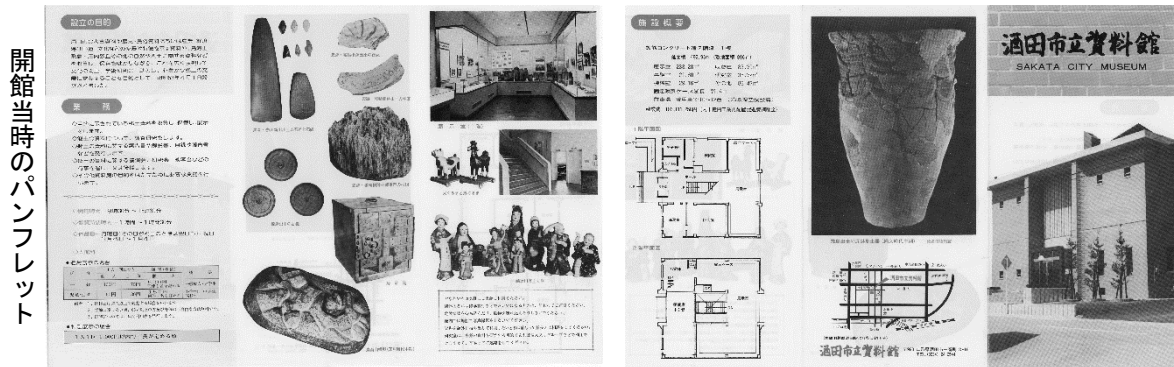


資料館開館のテープカット

昭和53年(1978)5月18日

左から、佐藤三郎資料館協議会長、斉藤辰夫市議会議長、相馬大作市長、阿部久米吉酒田市教育委員会委員長代理、入館第1号の市民、画家・戸田みつき。

戸田みつきがハサミではなくテープを持っているのは、開館に合わせて来館してくれたので、急ぎょテープカットに加わってもらったためです。※役職は当時のものです。



資料館開館時に「酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館」から譲り受けた資料

酒田市立資料館ができるまで、酒田市には歴史的な資料を総合的に収集、保管する施設がありませんでしたが、現在の「酒田市立光丘文庫」の前身にあたる「酒田市立光丘図書館」では、古文書などの文献資料以外に、民具や武器、考古資料などを収蔵していました。

資料館では開館にあたって、光丘図書館から文献以外の資料約1,900点を譲り受けています。現在、2階の常設展示室に展示している黒森遺跡や城輪柵跡の出土品、亀ヶ崎城関係の資料をはじめ、酒田の歴史や文化を伝える貴重な財産として、今日まで保管してきました。



昭和58年(1983)撮影



すがけこんいとおどしもがみどうまる
素懸紺糸威最上胴丸／江戸期

松山藩三代藩主・酒井忠休^{ただよし}が着用した「紺糸威最上胴丸」に似ており、何代かは不明ですが、松山藩主のものと考えられている甲冑です。

兜の前立（※1）には庄内藩主酒井氏の合印^{あいじるし}（※2）を表した「抱き角」があり、兜の鉢は錆地二十八間筋兜で、鐙^{しころ}（※3）は紺糸威黒塗板が三枚で、吹き返し（※4）に花菱紋を打っています。胴丸は最上胴丸といい、胴は鉄の帯状の板札を素懸^{おど}に威し、両脇の四か所に蝶番^{ちょうつがい}があります。甲冑を入れる革張りの箱には、庄内松山藩の「隅入平角片喰紋^{かたぼみ}」が描かれています。

- ※1 前立…兜の前方につける装飾。
- ※2 合印…戦場で敵味方を区別するための標識。
- ※3 鐙…兜の鉢の左右から後方に垂れて首を覆うもの。
- ※4 吹き返し…兜の鐙の両端を左右にひねり返した部分。

六十二間小星兜／年代不明



ありすがわのみやたるひと
有栖川宮熾仁親王の御用弁当箱／年代不明

有栖川宮熾仁親王は、戊辰戦争では東征大総督として出征した人物です。この陶製の弁当箱は、日清戦争の時に参謀総長として下った広島大本營で使用したものの、どのような経路で光丘図書館が所蔵するに至ったかは不明です。



ほんましゆんか
本間彝華「桜蒔絵盆」／年代不明

本間彝華は明治27年(1894)に酒田に生まれた漆芸家。琢成尋常高等小学校卒業後、鶴岡の田村青畝の元で蒔絵の修業をしました。21歳で上京し、漆芸家の辻村松華に師事し、技術を磨きました。

戦後は国宝修理にも携わり、皇太子の結婚、皇孫誕生の際は宝剣の箱に蒔絵を施しています。展覧会などでは何度も入選し、日展審査員も務めました。平成3年(1991)没。

玩具 犬と馬／昭和初期

車輪のついた台に木製の馬や犬をのせて引いて遊ぶ、男児向けの玩具です。



2階常設展示室に展示している光丘文庫旧蔵資料の一部

鳥海山模型／江戸期



近世には修験の山として山麓に多く修験の拠点が栄えていた鳥海山ですが、修験の発展は鳥海山南麓の庄内に発達した天台系の本山派(順峰)、北麓に発達した真言系の当山派(逆峰)の対立を生みました。これは、鳥海山頂の所有をめぐる庄内藩と矢島藩の境界問題でもあり、解決は幕府の判決にゆだねられます。

宝永元年(1704)、幕府は山頂と矢島側の中腹まで庄内藩領としました。調停の際、鳥海山の絵図と模型が作られました。

その模型は遊佐町吹浦の大物忌神社に収められましたが、控えとして作られたのがこの模型です。明治維新後に庄内藩から鶴岡県ら引き継がれて、光丘文庫から資料館に引き継がれました。

幕府軍艦「長崎丸二番」の貯水器 (戊辰戦争資料)

長崎丸二番はイギリス・グラスゴーで製造された鋼鉄船です。戊辰戦争の時に、旧幕府艦隊を率いていた榎本武明が庄内藩の応援のために、千代田形艦とともに派遣しましたが、酒田沖に到着した明治元年(1868)10月7日、暴風のため飛島・勝浦港に避難し、庄内藩の降伏を知ります。

上陸して半月後の23日、飛島は再び暴風に襲われ、港外への脱出を試みた長崎丸二番は座礁し、その後沈没しました。

この貯水器は長崎丸二番から引き揚げられたものです。



酒田市立^{こうきゅう}光丘文庫の歴史

大正12年(1923)、本間家三代当主・光丘の功績を顕彰する頌徳会が、本間家八代・光弥より先祖伝来の蔵書2万冊などの寄贈を受けて財団法人^{ひかりがおか}光丘文庫を設立し、同14年に「^{ひかりがおか}光丘文庫」が開館しました。

光丘は、宝暦8年(1758)から40年近くにわたって、修学のために文庫を兼ねた寺院の建立を江戸幕府に願い出ていましたが、新寺停止の政策により、実現することはできませんでした。その遺志を継いだのが光弥です。

昭和25年(1950)の図書館法施行に伴い、酒田市は光丘文庫の建物の一部と蔵書の一部を借りて「酒田市立図書館」を開設。同33年、財団は建物と蔵書などを市に寄付し、その事業を市に引き継いで解散しました。この時、酒田市立図書館の名称を「酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館」と改称しました。

昭和57年(1982)、酒田市総合文化センター内に酒田市立中央図書館が開設されたことに伴い、光丘図書館を古典籍や郷土資料を専門とする図書館分館とし、「酒田市立^{こうきゅう}光丘文庫」に改称しました。

建物等は平成8年に酒田市指定文化財になりましたが、老朽化に伴い同29年度に酒田市役所中町庁舎に移転しました。

令和6年度には、資料館とともに郷土資料を保管・収集・展示する新たな施設としてスタートする予定です。

人物資料①

日清・日露戦争で功績を重ね海軍中将に昇進

矢島 純吉

慶応元年(1865)～大正13年(1924)

矢島純吉は酒田町の根上家に生まれ、鶴渡川原村(現在の酒田市亀ヶ崎)の教育者・矢島晁英の養子になりました。兄は大正時代に『飽海郡誌』をまとめた郷土史家・斎藤美澄です。

明治19年(1886)に海軍兵学校を卒業し、同21年1月に海軍少尉に任官。日清戦争(1894～95)では水雷艇攻撃隊長として活躍しました。昇進を重ね、明治38年(1905)に海軍大佐となりました。肖像写真は海軍大佐時代の姿です。

日露戦争(1904～05)では、第十九艇隊司令、次いで第二駆逐隊司令として旅順港閉塞に参加。その功績から、明治39年(1906)に功三級金鵄勲章を授与されました。

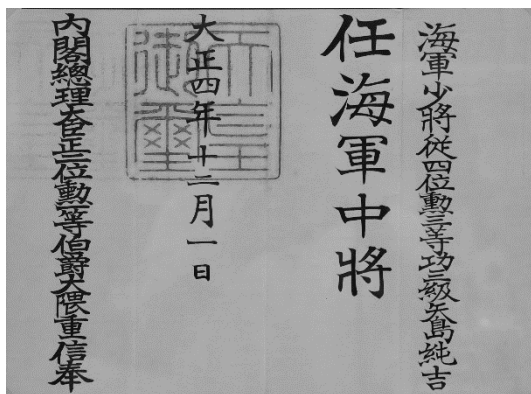
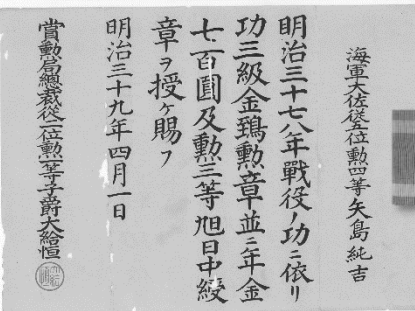
その後、舞鶴水雷団長を経て、大湊要港部参謀長、呉海兵团長、戦艦安芸艦長、横須賀海兵团長兼壱岐艦長などの要職を歴任しています。明治44年(1911)には少将となり、水雷学校長を務めました。大正4年(1915)12月1日に海軍中将に任じられるとともに、予備役編入となりました。

資料館では、平成5年にご遺族より寄贈された遺品161点を所蔵しています。



功三級金鵄勲章と勲記(証書)／明治39年(1906)4月1日授与

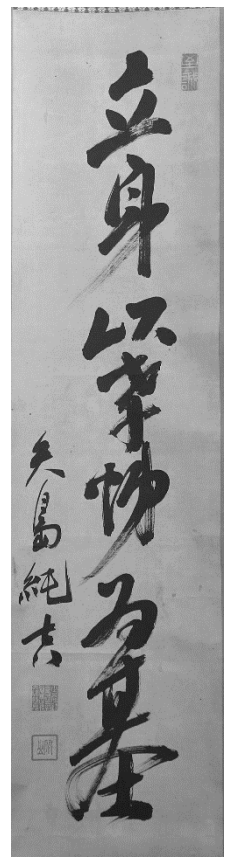
勲章は、国家や公共への業績を称えるために明治8年(1875)に始まった制度です。矢島純吉は明治38年(1905)に勲四等瑞宝章、翌年に勲三等旭日章と功三級金鵄勲章を授与されました。このうち金鵄勲章は戦前まで軍人または軍属に贈られた勲章です。



辞令「任海軍中将」

大正4年(1915)12月1日

立身孝悌を以て基と為す
 読み下し
 矢島純吉書「立身以孝悌為基」紙本墨書／昭和
 左下に印が二つ押されており、上の氏名印には「正五位勲三等功三級海軍少将矢嶋純吉印」、下の雅号印には「閑山」とあります。矢島純吉が明治四十四年十二月一日に少将に任じられてから、大正四年四月二十日に従四位に叙されるまでの間に揮毫した書です。



書に押された氏名印。
 正五位勲三等功三級海軍少将
 矢嶋純吉印
 と書いてあります。



人物資料②

習字の国定教科書の文字などを揮毫した書家

山口 半峯

明治2年(1869)～昭和14年(1939)

本名は彦總^{ひこふさ}。筑後町(現相生町一丁目、浜田一丁目)に生まれ、幼いころから書を得意としました。18歳頃には学力を認められ琢成学校に勤務し、後に酒田高等女学校で教鞭をとりました。

半峯は書を西尾鹿峰^{にしおろくほう}(※1)、長三州^{ちようさんしゅう}(※2)に学んでいます。明治31年(1898)には東北臨池会を設立し、自宅に書道塾を開きました。

明治43年(1910)、上京して私立中村高等女学校、次いで会計検査院に勤務し、その翌年に大日本臨池会(現日本書道研究会)を設立しました。

大正3年(1914)から没年まで宮内省に出仕し、勅語などの貴重文書の浄書に従事。大正9年(1920)に東京商科大学(現一橋大学)の講師となり、20年余に渡って教鞭をとっています。同年から小学校国定教科書の習字手本の揮毫を囑託され、以来手掛けた教科書は十数冊に及びました。昭和6年(1931)には文部省習字科検定試験委員に推されました。

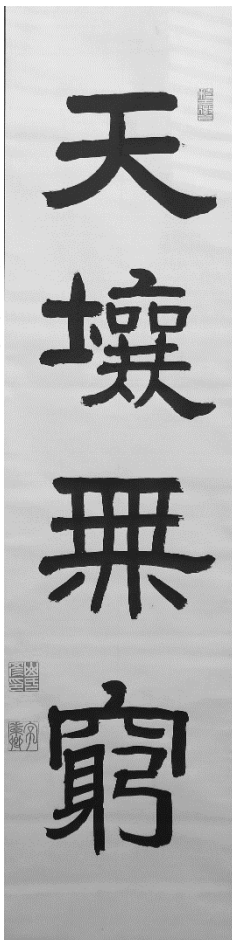
資料館では、平成14年度に、半峯の孫で庄内バイオ研修センター所長を務めていた山口彦之氏より酒田市に寄贈された作品や図書など106点、ほかに市民の方々から寄贈された教科書や掛軸などを所蔵しています。

※1 西尾鹿峰…書家/天保13年(1842)～明治33年(1900)。京都府典事や、文部省御用掛などを歴任した。

※2 長三州…書家、漢学者/天保4年(1833)～明治28年(1895)。文部省の学務局長や宮内省の文字御用掛などを歴任した。



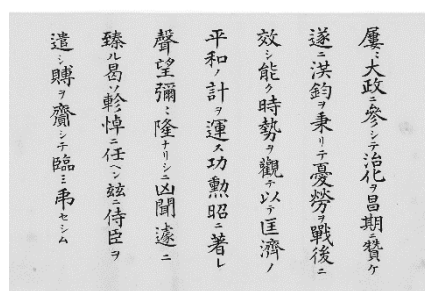
山口半峯 一行書「天壤無窮」紙本墨書/昭和



山口半峯 揮毫『新定小学習字帖』
明治28年(1895)発行

半峯が酒田で教師を勤めていた時代に執筆した尋常小学校用の文部省検定習字教科書。主に山形県内で販売されました。編集者は下小路の高橋信成、発行者は上荒町の鍋谷助右衛門となっています。

その後、明治37年(1904)から政府が執筆・編さんする「国定教科書」の使用が始まり、第二次大戦終戦まで続きました。最初の国定習字教科書の筆者は東宮御学問所御用掛などを務めた日高秩父でした。山口半峯はその後を継いで大正9年(1920)から甲種の習字の教科書を揮毫しました。



原敬への誄詞(るいし)草稿

大正10年(1921)11月10日

大正10年11月4日、総理大臣在任中に暗殺された原敬への誄詞(※)の草稿です。宮内庁時代に山口半峯が書きました。

※誄詞…死者をしのび、生前の功績を称えて哀悼の意を表す言葉。

人物資料③

「みちのく豆本」出版など酒田の文化活動に貢献

佐藤 公太郎

明治40年(1907)～平成20年(2008)

38年の長きにわたって「みちのく豆本」を出版し、酒田弁による昔話の語り手として活動した佐藤公太郎。将棋はアマチュア七段の腕前、茶人としては玉川遠州流の宗匠脇(準宗匠)の免状を受け、101歳で亡くなるまで酒田の文化活動に貢献し続けました。

公太郎は中町の小間物屋の長男として生まれましたが、両親は家業で多忙を極め、11歳の時に母親が急死すると祖父母に引き取られました。祖父の善兵衛は、裸一貫から身を起こし、相場で得た資金で田30町を持つ地主でした。

何不自由なく育った公太郎は、祖父の昔話を聞き、駄菓子屋で「五厘本」という豆本を買い集め、少年時代には読書好きが高じて初版本を集めるのが趣味になります。また祖父の将棋仲間と将棋や雑談を楽しんで過ごしました。酒田商業学校を卒業し、家業を手伝う以外は好きなことに明け暮れていたそうです。後の文化活動の基盤はこの頃に形成されたのでしょうか。

終戦直前の昭和20年(1945)の年明けからは酒田市役所に臨時職員として勤務し、その後正職員になり亀ヶ崎保育園長、酒田市立図書館長、酒田中央公民館長などを歴任しました。「みちのく豆本」の出版を始めたのは図書館長時代の昭和32年です。

昭和42年(1967)に高山樗牛賞、同50年(1975)に斎藤茂吉文化賞、平成9年(1997)に阿部次郎文化賞を受賞しています。



机に並べた「みちのく豆本」を見る佐藤公太郎
昭和39年(1964)

昭和39年11月10日付の新聞「新酒田」に26冊目の豆本『酒田十五年』(岸田隆著)の発刊を知らせた記事とともに掲載された。



「みちのく豆本」／昭和32年(1957)～平成7年(1995)発行

昭和32年(1957)に、佐藤公太郎が「みちのく豆本の会」を発足させて創刊した「みちのく豆本」。会員制で、発行は年4回(季刊)としてスタートし、平成7年(1995)に通刊130冊で終刊するまで、毎年欠かさず4回発行しました。個人が版元となって出版した豆本としては全国最長です。

発刊当時、酒田市立図書館長として『酒田市史下巻』の編纂にかかわっていた公太郎は、市史に使用できなかった貴重な文献や資料を何とか活字で残したいと考え、豆本の製作を思い立ったといいます。子どものころに駄菓子屋で豆本を買い集めた思い出も、大きなきっかけになっています。

発刊時の年会費は400円。会員数は100人に届かないところからスタートしました。しかし、郷土史あり民話あり、句集、スケッチありと、文化の先端をいく内容に加えて、酒田の商業デザイナーとして活躍した佐藤十弥が担当した装丁の美しさ、印刷の質の高さが読む人の心をとらえます。

昭和41年(1966)には朝日新聞の全国版に取り上げられ、全国から会員の申し込みが殺到するほどの人気を博しました。

豆本の会では、豆本130冊のほかに、別冊の豆本13冊、佐藤十弥の詩集などの書籍18冊を出版し、酒田の文化史、出版史に大きな足跡を残しました。

展示している豆本は、創刊当時から会員だった読者から寄贈されました。

人物資料④

宮海に定住して人形芝居を上演した人形遣い

吉田 天楽丸
よしだ てんらくまる

明治34年(1901)～平成9年(1997)

本名は佐々木時次郎。猿倉人形芝居(秋田)の創始者・池田与八(吉田若丸)の息子として、岩手県宮古市周辺で生まれました。

時次郎が「天楽座」を立ち上げ、吉田天楽丸を名乗るようになったのは昭和初年でした。昭和5年(1930)頃から北海道を巡業し、東北、さらには関東や関西まで巡業先を広げましたが、東北の大凶作によって興業が困難になり、昭和10年(1935)に巡業先の酒田市宮海に定住しました。

本業の人形遣いのほかにも、手相見や人相見、方位判断、祈祷師、お坊さん、石工、手品師、絵描きなどの職業を経験し、97歳で生涯を閉じました。十八番の演目は、コミカルな展開が楽しい『鑑鉄坊さん傘踊り』で、学校教育劇として制作された『アリババと40人の盗賊』は、学校で上演する際の定番演目でした。今回の展示では、『鑑鉄坊さん傘踊り』の舞台を再現しています。

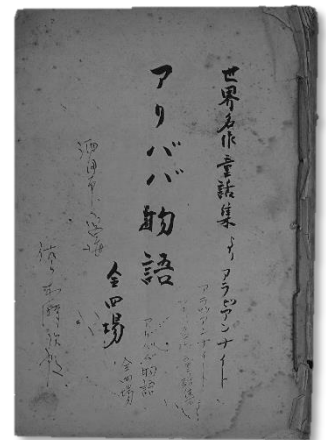
高度経済成長期、テレビが普及し始めた頃から一座の上演の機会は徐々に減りました。昭和55年(1980)、後継者育成のため酒田市西荒瀬地区に「天楽人形保存会」が設立され、西荒瀬公民館で公演を行うようになりましたが、後継者がいないため廃絶しました。

資料館では、平成21年に人形の頭や衣装、台本や囃子道具など天楽人形芝居資料をご遺族より寄贈いただきました。平成29年には酒田市指定文化財になりました。



吉田天楽丸と妻のアサエ

昭和55年(1980)3月9日、「天楽人形保存会」の結成時に西荒瀬公民館で人形芝居を上演した時の写真と思われる。



「アリババ物語」の台本
(酒田市指定文化財)



人形の頭



人形芝居の伴奏に使った笛
(酒田市指定文化財)



芝居の準備をする天楽丸
昭和57年(1982)

酒田市立資料館で人形芝居を上演した時に撮影した写真。



天楽座の幟
(酒田市指定文化財)

人物資料⑤

歌を愛し、酒田を愛した歌手

岸 洋子

昭和9年(1934)～平成4年(1992)

酒田市八軒町(現在の新井田町)生まれ。子どものころから歌が得意で、声楽家・加藤千恵に才能を見出されてレッスンを受けてました。

酒田東高校卒業後、オペラ歌手を目指して東京芸術大学声楽科に進学しましたが、病のため断念。療養中に聞いたエディット・ピアフの歌に魅了され、シャンソン歌手としての道を歩みました。

昭和36年(1961)に『たわむれないで』でレコードデビュー。卓越した歌唱力、表現力は日本中の人々の心をつかみ、『夜明けのうた』(昭和39年)、『希望』(昭和45年)など、多くのヒット曲を世に送り出しました。

岸洋子の病は難病といわれる膠原病でした。その歌手人生は平たんな道のりではありませんでしたが、平成4年(1992)に58歳で亡くなるまで精力的にステージに立ち続けました。昭和44年、同59年には文化庁の芸術祭優秀賞を受賞しています。

昭和51年(1976)の酒田大火後には、全国各地でチャリティコンサートを行い復興のために尽力し、紺綬褒章、酒田市特別功労表彰を受けました。

資料館では、十三回忌を迎えた平成16年に「岸洋子回顧展」を開催したのを機に、衣装やレコード、パンフレット類、ポスターなど200点を超える資料を、ご遺族から寄贈いただきました。ほかに同級生や熱心なファンの方からの寄贈も受けています。



昭和43年(1968)

琢成小学校(現在の酒田市総合文化センター)でNHK「ふるさとの歌まつり」を収録した時の写真。



高校時代の岸洋子



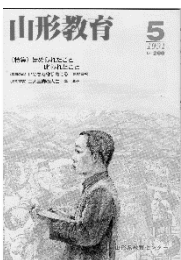
イタリアのサンレモ音楽祭で歌う岸洋子
昭和43年(1968)



岸洋子酒田後援会 会報第1号

昭和44年(1969)2月

昭和43年(1968)に発足した岸洋子酒田後援会の会報です。後援会長に選ばれた加藤千恵がメッセージを寄せています。会員名簿には676人の名前が掲載されています。



『山形教育』第266号と岸洋子が寄稿した原稿
平成3年(1991)



一年間の闘病を経て、病気と二人三脚の人生を大切に、あきらめずに生きていきたいという気持ちをつづっています。原稿は、亡くなる前年に体調が芳しくないなかで書き上げました。

人物資料⑥

全国制覇を果たし、自身の将棋道場で後進を育成

土岐田 勝弘

大正11年(1922)～平成20年(2008)

遊佐町生まれ。幼稚園時代から父親や近所の人の見様見真似で将棋を始め、小学校時代には竹内淇洲(※1)の酒田将棋研究会に通い、晩年の竹内に指導を受けました。

昭和15年(1940)に酒田中学校(現在の酒田東高)を卒業して内務省最上川改修事務所・酒田港工事事務所に勤務し、同17年に日本昼夜銀行東京本店に転職しますが、2週間後に徴兵され和歌山で終戦を迎えます。終戦後の昭和20年12月に荘内銀行に入行し、同55年に定年退職するまで勤めました。

中学時代から軍隊時代までの10年間は、将棋から離れていましたが、昭和21年から再び指し始め、同23年に初段になりました。以降、庄内、県内、東北6県の大会で活躍します。優勝回数は優に100回を超し、五段だった昭和51年(1976)、第2回アマチュア将棋王座戦で優勝を果たしました。

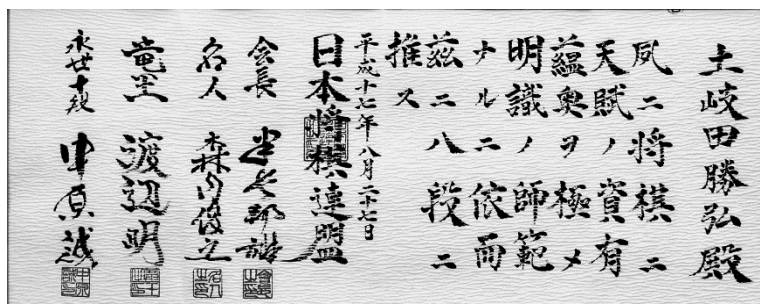
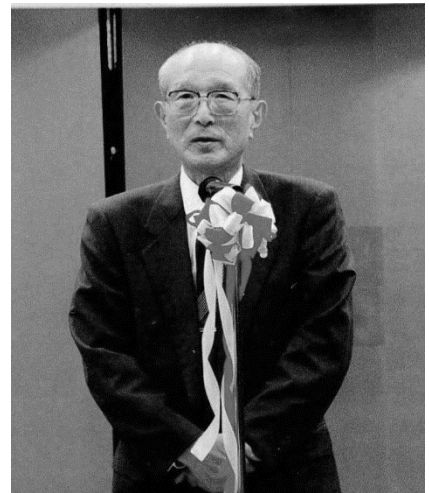
昭和52年(1977)に日本将棋連盟酒田荘内支部(※2)を設立。同55年には退職を機に土岐田将棋道場を開き、後進の育成に力を入れました。小中学生などの初心者にも基礎から将棋を教え、棋士の阿部健治郎七段を輩出しています。

アマチュア棋士としては全国トップレベルの活躍を続け、昭和62年(1987)、日本将棋連盟が立ち上げた「将棋指導員制度」により全国初の「棋道指導員」になり、平成11年に「棋道師範」を委嘱されました。同17年にはアマチュア最高峰の八段(名誉段位)の認定を受けました。ほかに平成8年に大山康晴賞を受賞しています。

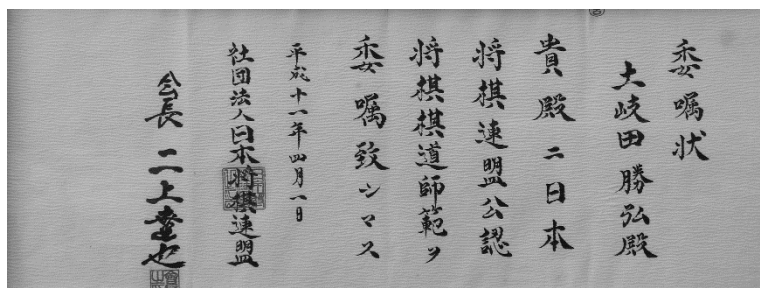
資料館では、平成29年に認定書や表彰状、トロフィー、道具類、色紙などをご遺族から寄贈いただきました。

※1 竹内淇洲…明治10年(1877)生まれの酒田の素封家。将棋は、大正7年(1918)に井上義雄八段を破って八段に昇格した腕前を誇り、多くの後進を育てた。囲碁も県下ナンバーワンといわれた実力者で、剣道の振興にも努めるなど、多方面で活躍した。酒田町議会議員も務めた。昭和22年(1947)没。

※2 日本将棋連盟荘内支部…現在は酒田支部と合併して酒田荘内支部になっています。



アマチュア八段(名誉段位)の認定書/平成17年(2005)



棋道師範委嘱状/平成11年(1999)



七段昇段記念のトロフィー
昭和61年(1986)

十四世名人・木村義雄、十五世名人・大山康晴、十六世名人・中原誠の連名で贈られたトロフィー。

戦後の酒田を写真に残した人①

新聞「新酒田」を発行

いけだ さぶろう
池田 三郎

明治35年(1902)5月11日～没年不明

給人町(現在の新井田町)に生まれ、大正11年(1922)1月、旧陸軍山形連隊に入営。志願して満州独立守備隊員として中国大陸へ渡り、現地除隊後は満州鉄道に入りますが、大正末期に病気のため酒田に戻りました。

昭和3年(1928)、のちに国会議員となる池田正之輔に出会ったことをきっかけに、正之輔が前年9月に創刊した「大衆日日新聞」の編集・取材を受け持ち、新聞記者としての人生を歩みます。

昭和7年(1932)に読売新聞社に入社し、日中戦争が始まった昭和12年(1937)の暮れから約1年間、東北初の従軍記者として北京を中心に取材。戦後は昭和27年(1952)に河北新報酒田通信部記者になり、定年まで勤めました。

昭和34年(1959)に病に倒れますが、昭和39年(1964)3月、61歳で月3回発行(後に月2回)の新聞「新酒田」を創刊。闘病しながら発行を続けました。酒田の時事問題に鋭く切り込む一方、酒田の変遷を写真でたどる「写真風土記」を連載するなど、紙面からは郷土愛を感じることができます。

新酒田の発行は昭和47年(1972)頃まで続いていることが確認できますが、いつ終刊したかは不明です。

資料館では、発行した新酒田の一部と原稿類、紙面に使用した写真のネガフィルムなどの寄贈をご遺族から受けています。



酒田駅前通り／池田三郎撮影



相生町(旧浜町通り)／池田三郎撮影



中町通り／池田三郎撮影

右の新聞に掲載された写真。記事のタイトルは「県内最初の駅前アーケード 続く浜町通りから中町へ 購買客へのサービスに万全」。この新聞が出た時にすでに工事が始まっていた酒田駅前通りと相生町(旧浜町通り)、検討段階にあった中町通り(旧中町、大工町、桶屋町、上鍛冶町、下鍛冶町)のアーケード計画について書いています。



昭和四十三年十二月十日付「新酒田」



光ヶ丘にあった酒田警察署
昭和40年(1965)／池田三郎撮影

昭和41年4月25日付「新酒田」に掲載された「新酒田写真風土記⑫ 治安の本部酒田署 本町から光ヶ丘へ」に使用された写真です。本町にあった庁舎の老朽化に伴い昭和32年(1957)に光ヶ丘に移転。さらに昭和53年(1978)に現在の上安町に移転し、この場所は親子スポーツ会館になりました。



郵便局があった頃の本町通り
昭和40年(1965)／池田三郎撮影
新酒田写真風土記⑫の記事下に使われた写真。



中の口橋から見た新井田川
昭和42年(1967)／池田三郎撮影

昭和42年9月10日付「新酒田」掲載「新酒田写真風土記⑫ 四十年前の新井田川」に掲載された写真。まだ整備が進んでおらず、明治・大正期の面影を残していました。



新酒田写真風土記⑫ 本町通りの変遷
昭和40年11月10日付「新酒田」掲載

戦後の酒田を写真に残した人②

酒田のカメラ界の草分けとして活動

杉山 勇治郎

生没年不詳

杉山勇治郎は、戦後の酒田のアマチュアカメラ界の草分け的な存在でした。

資料館では昭和54年(1979)に、杉山が撮影した1,000本を超えるネガフィルムの寄贈を、ご遺族から受けています。しかし、杉山の生没年や経歴に関する記録が残っていませんでした。

昨年、杉山と親交のあったカメラ関係者の方たちに聞いたところ、旧庁舎時代の酒田市役所にあった理髪所の仕事をしながら、昭和30年代から50年代のはじめにかけて精力的に活動し、50代で亡くなったということが分かりました。

杉山は酒田や庄内各地の風景やまつり、年中行事など、多岐にわたる事柄を撮影しており、当時の酒田の風俗を知るうえで、大変貴重な資料です。経歴等をご存じの方はぜひお知らせください。



港まつり仮装パレード

昭和31年(1956)／杉山勇治郎撮影

当時、酒田港まつりの人気イベントだった仮装パレードの一コマ。時代劇「忠臣蔵」の撮影風景の仮装をしています。

撮影場所は本町通り。当時の住所は本町五丁目で、後ろには庄内証券が写っています。通りの向かい側には酒田商工会議所がありました。現在この場所には商工中金酒田支店があり、住所は中町二丁目になっています。



中央公民館(本間家旧本邸)での公民館結婚式

昭和30年代中頃／杉山勇治郎撮影

戦後の日本では、生活の合理化、近代化を目指す「新生活運動」の実践が提唱され、その一環として推奨されたのが「公民館結婚式」です。酒田市の中央公民館では、経費1万円、披露宴会費1人500円、酒は2合以内、引き出物等廃止などの決まりがありました。1組目の挙式は昭和32年(1957)。当時は本間家旧本邸を中央公民館として借用していました。「酒田市勢要覧」によると、昭和39年(1964)の利用者は70組、3,170人に上り、昭和40年代前半まで盛んに行われていました。



大相撲酒田巡業

昭和36年(1961)8月上旬／杉山勇治郎撮影

この年の夏、日和山公園で大相撲の巡業が開催されました。荷物を担いで歩く力士の後ろに、酒田駅と駅前のアーチが写っています。酒田に到着したところを撮影したものと思われます。



清水屋の屋上遊園地

昭和37年(1962)頃／杉山勇治郎撮影

昭和36年、本格的なデパートとしてたくみ通りに新店舗をオープンした清水屋。屋上には自動木馬、回転ボート、飛行塔などの遊具を備え、家族連れでにぎわいました。



海向寺で行われた花まつり

昭和39年(1964)／杉山勇治郎撮影

酒田佛教和合会が毎年開催していた「花まつり」(お釈迦様の誕生日を祝う祭り)。大きな白象の像と子どもたちが練り歩く稚児行列は、酒田の春の風物詩のひとつでしたが、平成17年を最後に休止しています。

この年は海向寺が、花まつりの会場となる宿寺を務めています。写真は海向寺から通りに進む稚児行列の様子です。



第16回酒田こどもまつり 創作たこ展とたこあげ大会

昭和42年(1967)／杉山勇治郎撮影

日和山公園で開催された酒田こどもまつりのイベント「創作たこ展とたこあげ大会」の様子です。正面に写っている女の子の後ろにいる男の子が持っている凧の絵は、当時人気のあった「オバケのQ太郎」のようです。



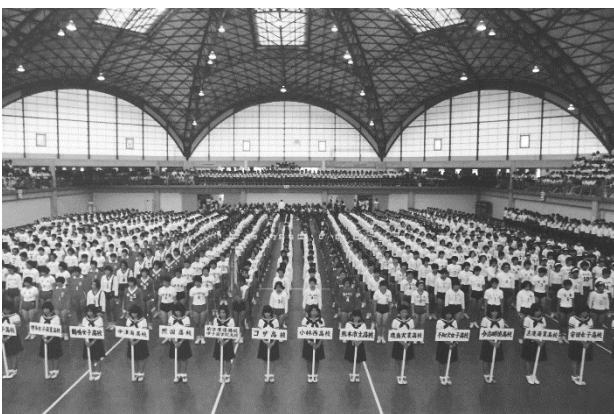
酒田市成人を祝う若人のつどい
昭和42年(1967)／杉山勇治郎撮影

現在、酒田市の成人式は1月に開催されていますが、この頃は新年度がスタートした4月に行われていました。会場となった旧市民会館の駐車場にあった噴水を囲んで、新成人がフォークダンスを楽しんでいます。



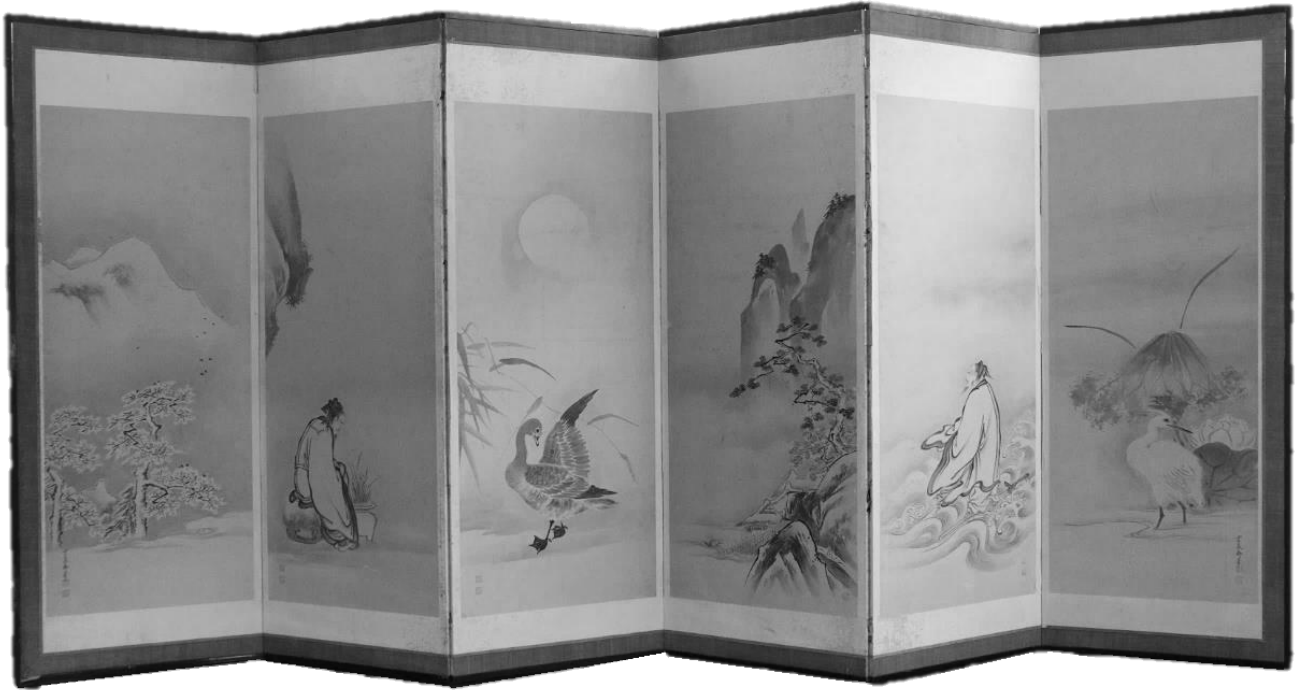
酒田港三百年祭(酒田港まつり)の仮装パレード
昭和47年(1972)／杉山勇治郎撮影

昭和47年は、寛文12年(1672)に川村瑞賢が西廻り航路を整備してから300年に当たり、酒田港まつりは酒田港開港三百年祭として開催されました。浜町通り(相生町)で撮影した写真です。



47インターハイ 女子バレーボール開会式
昭和47年(1972)／杉山勇治郎撮影

昭和47年、全国高校総体の女子バレーボール競技が、竣工直後の酒田市営体育館を会場に開催されました。この大会で酒田商業高校が第3位に入賞しています。



つづい うんせん 筒井 雲泉 山水人物花鳥図屏風（紙本墨画・六曲一双）／江戸後期
右隻(上) 8月5日～8月31日展示、左隻(下) 9月1日～30日展示

筒井雲泉／生没年不詳

酒田の旧寺町生まれ。12歳で京都へ上り、扇子屋に奉公して狩野派の絵を習得しました。後に酒田に帰って新地(現在の相生町、御成町)に住み、大酒を飲みながら絵を描いて、名人と言われたそうです。文政年間(1818～30)に60歳くらいで亡くなったと伝えられています。

この屏風に描かれている絵は、いずれも古くからある画題で、雲泉が絵の修業の中で習得したと思われます。現在展示している右隻には蓮に鷺、仙人、山水、芦に雁、高士(※)、雪景色を描いています。左隻には松に鳥、仙人、山水、竹に雉、滝を見る高士、雪景色を描いています。全体的に柔らかく丁寧な筆遣いです。

※高士…隠者。世間から離れて山林などで暮らした高潔な人。